

## ジェンダー教育と考古学

松本 直子

私は羽生先生と同じで、縄文時代を研究しているのですが、岡山大学に赴任してから、15年間ジェンダー教育ということで、主に学部1年生が受講する一般教養の授業で、「ジェンダーを考える」という授業をしてきました。その中で色々と感じたことや考えたことなどを中心に話をさせていただきます。

そもそもジェンダー教育というのがなぜ必要なのか。なぜそこに考古学が関わるのか。私たちというのは現代社会の中で生きているわけですが、その中で当たり前だと思っている色々なこと、常識を問い直すきっかけ、ないしは常識を考え直す根拠というのを考古学は用意できるのではないかと、ということです。ジェンダーというのは、もちろん考古学という学問にとっても、あらゆる社会においてジェンダー、性というのは重要な構成要素で、学術的な研究を進める上でも重要ですが、大学に来ている個々の学生がどういう人生を送るのか、ということを考える上でも、どういうジェンダー意識を持つのかということはとても大事なことになってきます。ジェンダー教育において、考古学がそこで果たす役割というのは非常に大きいのでは、と考えています。

今日はもう少し一般の方が多いのかなと思って、発表も一般向けに用意しました。プロフェッショナルな方には言わずもがなの部分も多いかもしれません。そもそもジェンダーというのは、色々な使われ方があります。性別そのものを表す用語としても最近ではジェンダーという語を使うこともあります。生物学的な性を表すセックスと区別して、文化的・社会的に作られたものを指すことが多いです。例えば自分の性別をどういう風に認識するかというジェンダーアイデンティティの問題や、社会的に作られた男女差、例えば男というのはたくましくあるべきだとか、女の人は優しくあるべきだとか、色々なものがありますが、社会的に作られた男女別の役割、こういうものも扱います。こういったものは程度の差はあれ、色々な社会にあるものですが、今日のお話は特に、「男は仕事で女は家庭」というような認識、これについて現代日本においては、それが非常に常識として強く普及していることをまずお話したいと思います。

ジェンダーについては大きく分けて、本質主義的な見方と構築主義的な見方というのがあります。本質主義的な見方というのはそもそも男女というのは本質的な性質とか役割の違いがあるのだ、と考えるものです。つまりは生まれつき、男は男らしい、女は女らしい、それを無理矢理に変えようとするのは百害あって一利なしなのだという人もいます。ただ、本当に男らしさ、女らしさ、男の役割、女の役割というのが生まれつき決まっているのであれば、無理矢理そうでなくてはならないという文化的規範がなくてもそうなるはずです。実際に、文化人類学や、世界の文化についての研究に基づいても、性役割の中身や、男らしさと女らしさの中身にはかなりの多様性があることがわかってきていますので、男らしさ女らしさが、本質的に生まれつきに決まっているという説は成立しないと思われまます。

その一方で、いわゆるジェンダー学という視点からは構築主義、あるいは社会構築主義と呼ばれる考え方があります。女らしさとか男らしさ、性別役割というのは社会的に構築されるのだ、いわば、後天的に社会の中で学習して学ぶものなのだ、と言われることが多いです。ただ、実態としてはそもそも性というものは生物学的なところで由来する部分もあるので、完全に遺伝子によって決まるわけでもなければ、全てがゼロから後天的に習得されるわけでもないわけです。ですから、その辺り非常に複雑な議論をしなければいけないのですが、世の中には結構どちらかに偏った議論というのが多くて、ちょっととんでもない視点から書かれた本や、インターネットでの情報などが溢れている状態になっています。

こうした議論をするのが非常に難しいのは、文化的に後天的に作られている部分というのも、人が生まれて物心つく頃、あるいはつく前から、周りからのアプローチによって、女の子にはピンクのドレスをあげましょうとか、遊ぶんだったら男の子だったらこうしなさい、とか色々な環境の中で本当に自分のものとして習得していきますから、大きくなってから自分の中の何が生まれつきで、何が後天的かは自分でもわからないわけです。そういうところを考え直す上では、今の常識ではないあり方もあるのだ、という情報がとても重要になってくると思います。

特に日本においては、こういう状況があることをご存知かもしれません。Fig. 4.2.1 は子供の有無による男女の賃金格差の国際比較ですが、子供がない場合、子供がある場合を比較しています。このグラフは子供がない場合の男女の賃金格差が少ない順に左から並んでいます。アイルランドとかオーストラリアは、子供がない場合は女性の方が、賃金が高い状況にある。右側になると、日本はかなり賃金格差が大きいこととなります。特に子供がある場合を見

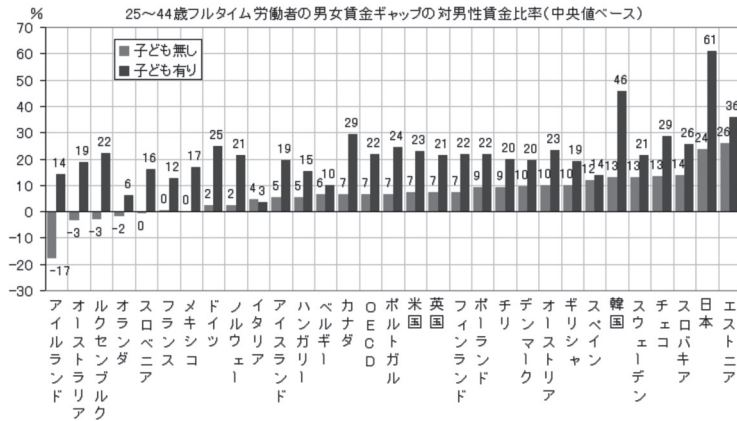


Fig. 4. 2. 1 子どもの有無による男女賃金格差の違い (国際比較)

注: 2007～2010年の諸資料に基づくOECD事務局推計。子どもの定義は16歳未満。日本は2008年値(テレビ報道)。国の並びは子ども無しの男女賃金ギャップの低い順。

資料: OECD, 2013. Closing the Gender Gap: Act Now. 図 13.3 OECD 諸国を通じて母親であることは高くつく」

URL: <http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/3352.html>

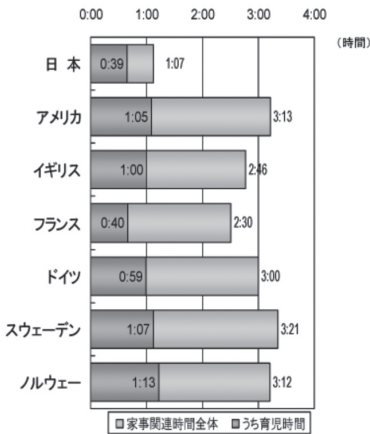


Fig. 4. 2. 2 6歳未満の子どもをもつ夫の家事・育児時間 (1日当たり)

資料: Euroset "How Europeans Spend Their Time Everyday Life of Women and Men"(2004), Bureau of Labor Statistics of the U.S. "America Time-Use Survey Summary"(2006), 総務省「社会生活基本調査」(平成18年)

\*日本の数値は、「夫婦と子供の世帯」に限定した夫の時間である。

ると、ダントツで世界トップです。この背景には、もちろん社会的制度、経済構造など、いろいろな問題が絡んでいるのですが、日本の場合は、特に女性は非正規雇用の人が多い。働いているといっても、正規の雇用ではない人が多い。そして日本の場合は正規雇用と非正規雇用では、給料がずいぶん違う、ということで収入にかなり差が出てしまっている、という状況があります。

次は6歳未満の子供を持つ夫の1日あたりの家事・育児時間をいくつかの国で比したものです (Fig. 4.2.2)。これはダントツに日本が低いです。つまり、家事・育児をしない。こういうグラフを授業でも見せます。岡山大学の学生さんは、留学生も若干いますが日本の学生

が多いので、日本の状況を彼らは当たり前だと思っている。それで他の国ではもっとお父さんが家事・育児をしていますよ、と言うと「へー」と驚いたりするわけですが、どうして日本では男女の賃金格差が大きかったり、男性の家事の時間がなかなか伸びないのか、ということになると、これは一部の政治家もよく言うことですが、日本にはそういう伝統的な文化があるから、ということで納得してしまう人も多いです。受講生に男女の格差とか、性差別ということがあるか、と聞くと、あると言う学生もいますが、結構多くの学生がない、と言います。学生の間はあからさまな差別というのはないわけです。勉強すれば同じように評価されますし、だいたいにおいて女子学生の方が成績が良かったです。全く差別されていない。むしろ男子学生の方が先生に男子に厳しいとか言って、女子の方が優遇されている、自分たちの方が差別されているんだ、という意識を持っていたりしますが、多くの学生は就職活動をして企業などに入っていくと、そこに厳然とある男女の賃金格差とか、あるいはセクハラとか、いろんな問題に直面してショックを受けるわけです。

もともと、ここではアメリカやイギリスが比較としてあがっていますが、例えば100年前に同じデータを取ったら、こんなに男性が家事していたんだろうかという、やはりここ数十年ぐらいで変わってきているところがあるのではないか、と思います。ではなぜ日本は変わらないのか、という時に、やはり「男は仕事」で「女は家庭」ということを非常に普遍的な真実という感じで捉えている学生が多い気がしています。

そういうこともあって、一度、平成18年にジェンダー意識に関する調査を学内のジェンダー意識に関するプロジェクトでしたことがあります。調査対象は岡山大学の文学部の1年生と4年生、大学に入ったばかりの学生と、勉強した学生で差があるかどうかをみてみましたが、社会学の先生にもしっかり入っていただいて、調査票を作って、アンケートをとりました。全部で225人なの

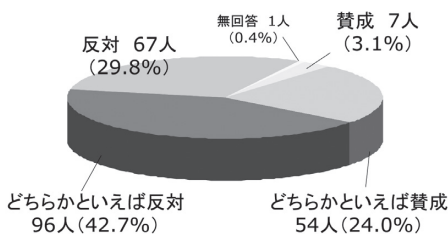


Fig. 4.2.3 アンケート結果：「男は仕事、女は家庭」という考え方に賛成ですか、反対ですか？

でそれほど大規模な調査ではないのですが、この中で、私はジェンダー意識と歴史認識の関係はどう思っているのか、というところに興味があったので、そういう質問を入れていただきました。「男は仕事、女は家庭」という考え方に賛成ですか、反対ですか、と聞くと、7割ぐらいの学生が反対あるいはどちらかといえば反対と答えます (Fig. 4.2.3)。3割ぐらいの人

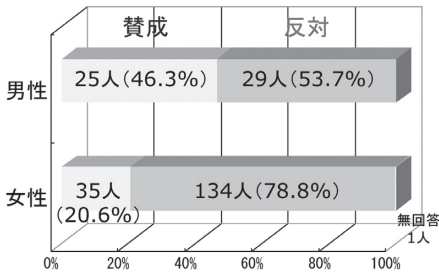


Fig. 4.2.4 アンケート結果分析：「男は仕事、女は家庭」という考え方に賛成ですか、反対ですか？」性別回答比率

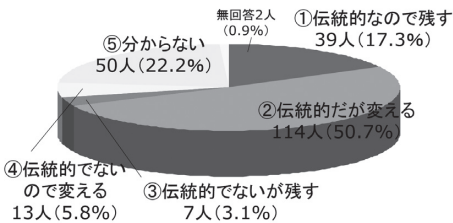


Fig. 4.2.5 アンケート結果：「男は仕事、女は家庭」という考え方についてどう思いますか？

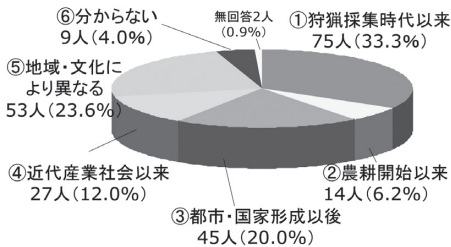


Fig. 4.2.6 アンケート結果：「男は仕事、女は家庭」という考え方はいつからあると思いますか？

は賛成というわけですが、これは内訳をみると男女の間に差があって、女子学生は8割近くが反対と言っていますが、男子学生は結構拮抗しています (Fig. 4.2.4)。そして、男子学生の家事をしたくないという意識が結構強いです。これはどうしたものかな、と思うのですが、歴史的な認識についての質問を設けて、伝統的かどうかという認識との絡みで聞いてみたのですが、「男は仕事、女は家庭」という考え方を「伝統的だけど変える」というのが半分くらい、「伝統的だから残す」という人も2割近くいます。伝統的でない、という人はすごく少ないです (Fig. 4.2.5)。変えた方がいいにしろ、そうでないにしろ、伝統的だという認識はかなり強く持たれています。では、その考え方がいつからあると思いますか、と聞くと (Fig. 4.2.6)、「狩猟採集時代から」と答える人が三分の一ぐらいいて、あとはいくつか答えを用意しましたが、学問的におそらく正解に近いのは「近代産業社会以来」とか「地域・文化により異なる」というのが正しいでしょう。

この「男は仕事、女は家庭」で女は家事や育児ばかりするというのは、基本的には産業革命以後のことです。サラリーマンというか企業に入って働きに行ってお給料をもらってくるという制度ができて、その中でイギリスは産業革命が早いですが、最初は男も女もみんな繊維工場や何かに働きに行っていたわけで、当時は職員に対する福利厚生という概念も充実していないので、みんな働きに行くと、出産とか育児とか全然できなくなる。これだと再生産、次世代を生み出せないということで男性の

方に余分にお給料を払うから女性は家にいるというシステムができてくるわけです。そこで近代社会的な主婦というのが誕生するわけですが、そういうものに対して、非常に古くからそうだと思っている学生は案外多い。アンケートの中で家族構成も聞いていますが、面白かったのは、特に古く、狩猟採集時代からそうだと答えた学生のお母さんはパート、非正規雇用である比率がとても高いです。お母さんが正規雇用の人とか、完全に専業主婦の人はそんなにいない。なぜそういう相関が出るのかははっきりとはわからないのですが、おそらく、お母さんがパートで働いているところというのは、お母さんの主たる仕事は家庭なのであって、仕事をするにしてもパートならいいよ、という言説がきっと家庭の中であるのではないか。その中でそういうあり方が昔からずっと続いているのだという認識が育まれやすくなっているのではないかな、と思っています。

ところで、みなさん、味の素の企業CM、ご覧になった方、いらっしゃいますか。私これをテレビでは見たことがなかったのですが、インターネット上で、賛否両論が非常に出てきたので、見てみました。私が見たときはYouTubeで見られたのですが、今は非公開になっているので残念ながら見られません。BGMでかかる歌が非常にのどかで、いい感じの歌です。お母さん役の坂井真紀さんが朝起きて、朝ごはんを作るところから始まります。朝ごはんを作って洗濯して干して、子供を着替えさせて食べさせてそれで専業主婦なのかなと思ったら子供を自転車の前と後ろに乗せて保育園に連れて行ってそれから会社にも行く。会社で仕事をしますが、会社で仕事をしながらも自分の作ったお弁当子供たちはちゃんと食べてるかな、と思うシーンが入って、それでまた帰りに買い物をして子供を保育園に迎えに行って、家に帰ってご飯を作って子供に食べさせるのです。お父さんがいないのです。これを最初見たときにはあまりにもお父さんの存在感がないので、母子家庭かな、と思いました。でももう一回よく見ると、いるのです、お父さんが。お父さんは背景に映っているのです。お母さんが働いている後ろでパソコンしてたりします。でも夕ご飯の時はいない。それで歌の歌詞が、「毎日毎日ご飯を作る、何十万年もお母さんが続けてきたこと」なのです。何十万年も、です。何十万年前というと、ホモ・サピエンス以前です。ネアンデルタールとかも、お母さんが毎日毎日ご飯を作るとい

\* 下部にある註は吉田泰幸による

**味の素の企業CM** ここで問題となっているCMについては、インターネット上にまとめサイトが存在する。

URL: <https://matome.naver.jp/odai/2135753246407557301>

動画を見ることが出来る時もある（2017年2月5日にアクセス）。



うことになってしまうのです。それで歌詞が「誰に決められるわけでご飯を作る」、「何十億人のお母さんが続けてきたこと」と続いて、すぐのどかない感じの音楽です。それで、過去のお母さんがご飯を作ってきたシーンが映像とか入るのですが、大昔にお母さんが肉を焼いている絵も入ります。これはないだろう、と思って、私も大変ショックを受けましたが、お父さんはどこにいらっしゃるのでしょうか。狩りの最中に死んでしまったのでしょうか。

これには、お母さんに対する愛情が深まったという好意的な反応もあるのですが、やはり家族のためにご飯を作っているお父さんとかおじいさんとか、そのほか諸々の人たちはこれに不快感を示しています。また、今まさにすごく大変なお母さんたちは、辛すぎて涙無しには見られない、という意見も出ています。ですから、これがいいCMだと信じて、味の素さんは作っているのですが、ある意味とても悪質なCMだと思います。食事を用意するのはお母さんの仕事で、それは何十万年も前からずっとそうで、地球のどこでもそうなんだというメッセージを出しているわけです。もちろんコマーシャルや歌というのは常に厳密に科学的に正しくあらねばならないということはないですが、こういうCMが流されてしまう状況というのは、非常にジェンダーの問題について無自覚な状態というのがあるのではないかな、ということで、考古学者は黙っていてもいいのだろうか、心配になるわけです。ちなみに、コマーシャルのジェンダー観というのはこれまで色々歴史がありますが、1975年ぐらいにラーメンのCMで「私作る人、僕食べる人」というCMがあって、それは結構批判が起きて二ヶ月ぐらいで打ち切りになりました。だけど40年経ってもまだ変わっていない。こういうCMがいいと思っている状況はあるということです。

こういう風に男は外に仕事に行って、女性は家庭で家事や育児するということがある意味、太古からの不変のものだという認識がとても強いわけですが、この問題については欧米ではジェンダー考古学という分野が1980年代ぐらいからできてきました。この中では、考古学者が考古学をやるときにも、男目線の復元をやってしまっているかもしれないことに対する批判や、考古学者自体に女性が少ない点などを批判したコンキー（Conkey）とスペクター（Spector）の論文（Conkey and Spector 1984）というのが嚆矢です。その後90年代ぐらいから、本、論文、シンポジウムで盛んにジェンダー考古学が行われてきていて、大学でもジェンダー考古学を教えているところがたくさんあります。日本は歴史学についてはかなり早くから女性史という分野が発達してきて、歴史の中で女性の果たした役割や、古代においては女性の役割は非常に大きかったことが指摘されたり、そういう研究はベースとしてあって、考古学についてもかなり男性、女性の役割などについての研究も進められてきている側面はあります。むしろ、欧米よりも進んでいる面もある。特に、もう亡くなられてしまいまし

たが、佐原眞さんはジェンダーを21世紀の日本考古学に中心的なテーマにするべきだと主張されていましたが、まだまだ、ジェンダー考古学の面ではこれからやるべきことがたくさん残されているのではないかと感じています。ジェンダー考古学にもっと積極的に関与していかないといけないのでは、と思っています。

私が岡山大学で行ってきた授業は、主たるものとしては「ジェンダーを考える」という教養教育の主題科目です。これは毎年やっていて、受講生は100から120名ぐらいいます。医学部とか教育学部、いろんな学部の学生が受講します。そのほかにも考古学講義などでも単発的に教えたりはしていますが、ジェンダーを考えるという授業の学習目標は、性役割だとか男らしさ女らしさについて、社会的な性の役割は多様であるということをもっと学生に認識をしておこう、ということです。それとともに生物学的、身体的な性についても踏まえてもらったうえで、人間社会における性という複雑な問題について総合的な視点から考える力をつけてほしい、ということで授業をしています。授業の目的としては常識を問い直す大きなきっかけにしてほしい、ということがあります。「男は仕事、女は家庭」というのはいつからか、というと多くの人はあまり何も考えていません。ただ、ずっと昔からそうなのだろうと思っていることが多い。海外の事例なども紹介しますが、例えばフランスだと法的な結婚する人が少なくなっていて、婚外子が5割を超えているのですよ、という話をすると学生は「へー」と言いますが、やはり自分につながる歴史、多くの学生は日本人ですから、日本列島の中でも、過去には多様なジェンダーの在り方があったと知ることが、自分がこれからジェンダーについてどう向き合うか考え直すとてもいいきっかけになっているのではないかと、思います。

伝統という言葉はある意味、掴みどころがないというか、危険な概念で、かなり短期間に伝統というのはできてしまいます。私たちが直接、知ることができる過去というのは自分が生まれてから現在までしかないですし、直接人から聞くことができる過去というものもせいぜい、おじいさんおばあさんから聞く範囲なので、自分が生まれる前、60年とか70年前です。ですから、今の学生たちが思っている伝統的な社会というのはもう、ほぼ昭和の世界です。非常に長期的な変化というのを普段イメージすることがない。同じ地域をとってみても、時間とともに社会の在り方というのは変わりうるのだということを教えることはとても大事ではないかと思っています。これはなかなかうまくいなくて、授業の最後に学生にレポートを、これから20年先にあなたはどのような人生を送りたいですか、とジェンダーの視点から書いてもらいます。多くの学生は40代になっておそらく社会の中で活躍したり家庭を持ったりしているで



しょう、その中でどういう問題に直面するでしょうか、今問題になっていることのどのあたりは解決していると思いますか、と問いかけると、かなりの学生が20年ぐらいでは変わらない、と言います。とにかく、なかなか変わらないと言う学生はとても多いです。社会が実際に変わるというイメージを持つのがとても難しいようです。いつになったら変わるのと聞くと、今社会を作っている人がみんな死んだら変わると答えたりします。でも、それを待っているだけでいいのか。いろいろな人たちの行為の結果として今の社会があるという認識ができれば、自分の望ましい方向に変えていくには自分はどうすればいいか、ということが考えられると思いますが、なかなかそういう余裕がない学生が多いように思います。

それから、考古学の情報発信のあり方がとても重要になってくると思います。具体的に授業でどういうことを言っているのかをざっとお話しますが、例えば縄文時代の土偶を取り上げます。縄文の土偶は女性を表したものが多いです。学生たちも中学・高校で土偶というのは知っています。教科書にも載っていますし、有名な土偶は知っていますが、土偶についてどんな知識を持っていますかと問うと、妊娠した女性を表しているとか、豊穰祈願のためなんだと言います。棚畑遺跡の土偶はそういう考えに合致してくる造形ですが、土偶にも実は色々なものがあるって、常に妊婦を表しているわけでもないし、すごく女性らしい体つきのものがあればそうでないものもある。おそらく女性というもののイメージは縄文時代の中でも社会や状況によってすごく変わってきている。祭祀の仕方が変わる中で、女性像として作るものとはいえ、その中身のイメージは結構、変わっているんだよ、という話をします。今の女子学生だと、女性というのは美しく、異性を魅了できなければいけない、という非常に強いプレッシャーを持っていたりします。女性というものに付与される色々な意味だとか、価値だとかそういうものは社会によって多様にありうるということを話しています。土偶も縄文時代各時期によって色々変わるんですよ、と話しています。考古学というのはモノがあって、土偶の持つ魅力というのがあるので、こういう話をすると学生は土偶自体の造形が非常に多様であることにとっても興味を持ちます。それで自分でももっと色々の可能性を考えてみたいとか、そういう意見が返ってきます。

**棚畑遺跡の土偶** 長野県茅野市の縄文中期・棚畑遺跡から出土した土偶は、国宝に指定されていて、「縄文のヴィーナス」と称されている。腹部は大きく膨らんでいる。

**土偶にも実は色々なものがあるって** 小杉 2002 や松本 2004 において、土偶の性格の多様性が論じられている。筆者も土偶の性格は豊穰や多産との結びつき以外の可能性を追求した方がよいと考えている (吉田 2009)

女性の話ばかりではなくて、縄文時代は石棒という男性の力を表すような遺物もあって、石棒が石でできているのに対して土偶は土でできている。石棒というのが身体的には partial、部分的な表現であるのに対して、土偶は特に後半期のもは全身像で顔もついている、パーソナリティがある。これは縄文社会の中で男性性、女性性というものがある意味、別のものとして世界観の軸になっている、そういう話をしたりしています。

ただ、どちらが上という単純な話にはならないということで、先ほど羽生先生の方から生業の話がありましたが、植物質食料の利用というのが定住化、遺跡の大規模化を考える時には重要ですが、滋賀県の粟津湖底貝塚から出てきた動植物遺体からカロリー換算をしてみると、トキノキとかヒシとか植物質食料からかなりの部分のカロリーを得ている。シカとかイノシシがいわゆる狩猟対象獣になりますが、カロリー的にみると、そういうものは1割ぐらいです。男は仕事、女は家庭というイメージをそのままスライドさせて、お父さんは仕事で何をしているかということ、動物を獲りに行っていることになります。そうすると植物質食料は誰が取ってくるのか、食べ物（カロリー）の半分くらいの量を誰が取ってくるかということ、全部お父さんが取ってくるとは考えにくいですから、女性が経済的に大きな役割を果たしているはずですよ。この辺りを、人類学の成果も踏まえながら、女性の経済的な労働力というものが先史社会においては非常に重要で、今みたいにお父さんの給料を家で家事しながら待っている状況をそのままスライドさせてはいけないんだよ、という話もします。私が『縄文のムラと社会』（松本 2005）という本を書かせてもらった時には、イラストレータの細野修一さんをお願いして、お父さんが狩りから帰ってくるころとか、狩りをしているところの絵というのは巷に溢れている一方で、女性が採集活動から帰ってくる絵というのはあんまりないので、それを描いてくださいとお願いしました。復元画とかジオラマというのが一般の人にもわかりやすいような情報発信において、女性の経済的な役割の部分というのがかなり過小評価されていると言ってもいいと思っています。

そのほか、**抜歯**の話もします。特に西日本の縄文晩期に非常に発達する風習ですが、かなりのメンバーが抜歯をします。これは痛そうだと学生がびっくりしますが、抜歯研究もあんまり突っ込んだ話は授業の中ではできないのですが、施行年齢などを考えると、おそらく成人儀礼、大人になるある種の段階として、儀礼をやっているということで、おそらくお祭りでも抜いたと思いますが、

**抜歯** 歯の抜去後の歯槽閉鎖に一定のパターンが認められることから、風習抜歯と考えられるものを指している。日本列島では縄紋中期末以降、特に発達し弥生時代以降も散見されるが、縄文晩期

の東海地方において特に発達し、それらの遺跡における抜歯率は90%以上にも達することから、通過儀礼としての意味合いがあったことが想定されている。

これは男女を問わず、やっていますので、男性だけが何か特別な責任を持つべくやるわけではなくて、男も女もみんなやらないといけなかった。こういうところから、少なくとも抜歯をやっている縄文時代の社会では大人の責任という点ではっきりとした男女の差は見えないんだよ、という話をします。

その後どうなったのか、という話で、弥生時代に入って以降の関東や中部地方で出てくる土偶型容器、骨蔵器と言われていますが、これは男女ペアで作られるのが特徴です。縄文時代では男女ペアというのは同じものでは作られないのですが、弥生になると作り出す。この辺りにも、男女、ジェンダーの関係が変化したことがわかります。しかも初期の段階は男女ペアと言っても、大きい方に乳房がついている。女性の方を大きく作ります。それが次の段階に行くと、男性の方が大きくなる。体格的には、平均では男性の方が身長は高いのですが、造形というのは必ずしも物事の実態を客観的に表すとは限らないので、作る人たちの世界観、何を表すか、というのに基づいて造形、サイズが決まってきます。初期の段階で女性の方を大きく作るのは縄文時代の土偶祭祀の影響もあるかもしれません。その段階があって、次に男性の方が大きくなる。古墳時代になるとまだ前期には女性首長がいますが、それがいなくなるとか、そういう話を通して、日本列島におけるジェンダーのあり方が如何にダイナミックに変わって行くか、色々な社会情勢だとか政治だとか階層化の問題と絡み合っ、ジェンダーのあり方が変わっているんだよ、という話をします。

それと、ここ数年話をするようにしているのは、クィア考古学という分野についてです。トーマス・ドーソン (Thomas Dowson) さんという方が、自分がゲイであることを公表して実践しています。クィアというのは元々は標準ではない、とか変態だとかそういう負の意味があった言葉ですが、それを逆手にとって、一般的な主流の規範にはまらない視点というのを積極的に正面から追求していこうという考古学です。100人くらい私の授業を受講する学生がいると、既存のジェンダー観にはまらない学生も必ずいます。同性愛であるとか、性別違和、自分の身体の性別とジェンダー的な性が合致しない学生もいます。今の現代日本社会で優勢な枠組みにはまらないということでもともストレスを感じている学生というのが数人います。そうした人たちは数でいえばマイノリティなのかもしれませんが、社会の中にはそういう人たちがいるはずです。あらゆる社会にその社会なりの性の規範があると思いますが、ずっとそれに馴染まない人というのは必ずいます。現代日本社会もかなり強固なジェンダー概念というのがありまして、その中でそこには自分にはまらないんだ、という学生がいるわけで、考古学は学問としてそういう問題も視野に入れた上で研究をしています、ということをお話するのは、普段は疎外感を感じがちな学生にとっても重要

なことではないかと思えます。私自身はこういう研究はしていませんのでざっと紹介するだけですが、World Archaeology という雑誌では 2000 年に Queer Archaeologies という特集が組まれました。その時の表紙はエジプトの古代王朝のお墓で、二人の男性のお墓の浮彫りで、非常に仲が良さそうな風情で描かれています。夫婦が描かれる時と同じような描き方で二人の男性が描かれていることから、最古のゲイカップルを示しているのではないかと、言われています。こういうところも、日本考古学の中で見て行く必要があると思えます。

最後に、復元の問題ですが、考古学者も現代社会の中で生まれて現代的なジェンダー観を持っていますので、どうしてもそのジェンダー観に基づいた復元がされがちなところもあります。過去のジェンダー復元については、どこまでがデータに基づいているのか。ただ考古学のデータというのは非常に限られていますので、何か絵を描こうとか、ジオラマを作ろうとするとどこかを推定で埋めなければいけなくて、その点が重要になってくるわけです。専門家は見てある程度は判断できるわけですが、一般の人たちは必ずしもそうではないわけです。それを全体像として受け取ってしまう、というところがあります。例えば代表例として「はじめ人間ギャートルズ」などがあります、私も好きでしたが、こういうアニメーションはある意味見る側も、全部本当だとは思って見ませんので、ここでもお父さんが狩りをして家で吞んでくれています、これはそれなりのフィルターを通して見るでしょう。

より注意すべきはもう少し真面目な、専門的な復元画ですが、男性が狩猟をするシーンがかなり多く描かれます。もちろんこれは面白いし、魅力的だからですが、それに比べて女性の採集のシーンなどはあまり描かれないところがおそらく問題だろうと思えます。竪穴住居の中の復元というのはなかなか難しいですが、朝日百科の中の絵などは絵としてとてもいい絵ですが、これも登場人物は核家族です。お父さんとお母さんと子供が二人です。もちろん専門家を見ると、この復元画でみせているのは、どんな道具が使われているとか、あるいは魚が頭を落とした状態で天井に吊るされていて保存食作りが行われているとか、家の柱の作りとか、食料を貯蔵しているとか、こういうところを見せたいのだろうな、と思えますが、一般の人がこれを見ると、お母さんがご飯を作っている、お父さんはできた頃に起きてきた、と見えるのではないかな、と思えます。

栃木県立博物館の中のパネルも、絵としてはいい絵だと思いますが、これも

朝日百科 1994年の朝日百科 歴史を読みなおす1「縄文物語：海辺のムラから」の表紙イラスト。

「復元／岡村道雄、イラスト／中西立太」とされている。

おじいさんが編布（アンギン）を編んでいるとか、色々と細かいところを見ると面白い、シャケが吊るしてあったりとかも面白いのですが、一般の人が見ると、お母さんがご飯を作っている、と見えます。お母さんは、本当によくご飯を作っています。これがやはり、「何十万年もご飯を作り続けたお母さん」のイメージに寄与している、とまではいかななくても、それを考え直すきっかけにはならないと思います。お父さんとお兄ちゃんウサギを持って帰ってきた。これも仕事から帰ってきたイメージです。お父さんは外で狩りをしていて、ちょっと大きな男の子と一緒にいって、食べ物を持って帰ってくると、お母さんは赤ちゃんもいるし、大変だと思いますが、お家でご飯を作って待っているという描かれ方です。

縄文時代には小さい子供の手形とか足形を押したものが北日本でいくつかの遺跡から出てくるのですが、これはどういう時に作ってどういうふうに使ったのかわからない遺物ではあるのですが、山梨県立考古博物館の方で「発掘された女性の系譜：女性・子ども・家族の造形より」（2010年）というとても面白い特別展をされて、私は残念ながら見にいけなかったのですが、図録を見て色々勉強になりました。この足形をとる様子が復元画になっているのですが、お父さんはどこにもいないのです。おそらく狩りに行っていると思います。これもどういう状況で足形をとったかはわからないので、ひとつの可能性を示す絵ですが、私はいろんな可能性を示す復元画ができてきてもいいんじゃないかな、と思います。これはやはり、男性は外に仕事に行っていて、家には女性が残っていて、土器を作ったりはしているものの、何か子供の行事をする時にはお父さんは忙しくていない、というちょっと現代的な家族観を持った人を見ると、非常にスーッと入ると思います。ただそのスーッと入るところが実は危ないところじゃないかと思えます。

大阪府立弥生文化博物館のジオラマでは、これも竪穴住居が作ってあって、お父さん、お母さんと子供が二人と、犬もいますが、家族団欒の夕食のシーンです。これについては菱田淳子さんが以前に博物館や美術館におけるジェンダーの展示の問題を上げていて、菱田さんは弥生時代の人は女性も必ず昼間は男性と一緒に農作業とか色々生産活動をしていたはずなのに、家に帰ってきたら、女性の方だけがかしずいてご飯をあげるシーンというのは、とても不愉快だと書かれています。男性があぐらをかいていて、女性が正座しているとか、この辺りも考古学的なデータはないのですが、館の展示を企画された方に聞いたところ、色々なポーズも考えたのだけれども、あまり奇抜な格好をさせると見る人がそこばかり見てしまう、例えば女性が立膝とか、あぐらをかいていたら、そこに意識が集中してしまって、考古学者が見てもらいたい、どんな土器をどんな風に使っていましたが、竪穴住居はこんな感じですよ、というところを





Fig. 4.2.7 Henri Breuil 氏による旧石器時代復元画（Breuil 1949 “Beyond the Bounds of History” より）

見てもらえないんじゃないか、と考えると、結局今の私たちが持っているジェンダーイメージにスーッとなじみやすい情景の中に考古資料がはめられていくということが起こりやすくなっていくんだろーと思います。また博物館側の意図としては、石器とか土器とか、なかなかそれ自体では理解してもらえないので、なんとか親しみを持って欲しいという意図があってやっていることですが、そういうやり方だけをやっている、結局今の私たちが持っている現代的なジェンダー観を、やはり太古の昔からこうだったとむしろ補強してしまうようなことに、結果的になってしまう可能性がある、ということです。

そうではない例を示しますと、アンリ・ブレユ（Henri Breuil）というヨーロッパの旧石器研究の大家の方が、“Beyond the Bounds of History”(1949年)という専門書ではなくて、子供だとか、そういう人に向けて啓発本のような形で書いた本の挿絵があります（Fig. 4.2.7）。これがなかなか面白くて、私はレディング大学に1年間行っていた時に、そこでロベルタ・ギルクライスト（Roberta Gilchrist）さんというジェンダー考古学の研究者が教材に使っていたので知ったのですが、ブレユさんはこの本を書く前にアフリカに民族調査に行っていて、女性も狩りをやっているという情報を聞いて、女性も男性も同じように石器製作とか狩りをしているシーンを描くべきだとなって描いたとのことで、全く根拠なく描いているわけではありません（Fig. 4.2.7 左）。絵はプロではないBreuilさんが描いたのでクオリティとしては微妙かもしれませんが、なかなか女性が石器を作っているシーンは見ないです。だけど、本当に女性が作ってなかったのかと言われると、そうも言い切れないので、特に旧石器時代になると縄文時代よりもさらに情報量は少なくなりますが、それなりにいろんな可能性を追求していくことはとても大事なのではないかと思います。ホラアナグマの狩猟のシーンでは先頭に立ってクマを仕留めようとしているのは男性なのですが、後ろの方で女性が予備の槍を持ってスタンバイしている風に描かれ



ています（同右）。狩りも男だけが行って、女性が「あなた行ってらっしゃい」というわけではなくて、一緒に狩りをしているシーンになっています。もう少し、日本の考古学もいろんな冒険を、いろんな可能性を示していてもいいのではないかな、とったりするわけです。

ではこれから何をすべきか、ということですが、学術研究としてはデータに基づいたしっかりとした研究をしていくべきだ、と思います。その上で、現代のジェンダーバイアスにとらわれない解釈をできるだけしていくということだと思います。というのは、一部こうした研究もありますが、昔は女性が大きな権力を持っている、昔は女性の方が立場が上だったという証拠だけを探しても、これはお互いにとっていいことはないわけです。しかも過去がそうだったから今もそうあるべき、という言い方も論理的にできないので、過去はあくまでも過去です。そこから何を読み取るべきかというのは、色々なありうる可能性、そういうものを見ていくべきだと思います。過去が今のお手本にそのままなるわけではないです。現代のジェンダーのあり方というのが、太古から不変だとか、だからこれからは変わらない、という認識を如何に突き崩していくか、というところがポイントになってくるかな、と思います。

そのために、効果的な情報発信というのをしていかないといけないと思います。今、いくつか復元画とかジオラマについて触れましたが、個別の復元画を批判するつもりは全くありません。それぞれはそれなりに素晴らしいものですが、これから新しいものを作っていく時に、例えば戦略として、今の私たちのジェンダー観になじみやすい構図以外の、むしろ今の私たちのジェンダー観を揺さぶるような展示というのも作って、昔はこうだった、ではなくて、どうだったのでしょうか、と見る側にちょっと考えてもらうような展示の仕方というのをもうちょっと、増やしていてもいいのではないかと思います。特に学生のような若い世代の人はなかなか博物館に行きません。行ったことがないという人も、パラパラといます。すごく頑張っていい展示をしても、なかなか若者には伝わらない、という問題もあります。一番効果が大きいのは、インターネットの情報だと思います。今、学生はほとんどスマートフォンを持っていて、いつも何か調べています。

2005年くらいに安倍晋三さんがプロジェクトリーダーになって、「過激な性教育・ジェンダーフリー教育実態調査プロジェクトチーム」というのを立ち上げていて、今は大臣の山谷えり子さんが事務局長をやっています。そのウェブ

**そのウェブサイト** 現在は「過激な性教育・ジェンダーフリー教育実態調査プロジェクトチーム」のウェブサイトは確認できない。

サイトでジェンダーフリー教育がすごくはびこっていて、過激な性教育が行われていると指摘していますが、過激な性教育と名指して攻撃された養護学校の事例は最高裁で判決が出て、プロジェクトチーム側が負けました。それは養護学校の生徒は自分の身を守るために効果的な授業をしていたにもかかわらず、それをむしろいやらしい目で見て、ポルノまがいだと言って取り上げた側の責任が追求されているわけです。その頃は政府主導でジェンダーフリー教育は行き過ぎている、危険だと言うウェブサイトがあって、ひとつそういうサイトがあると、それに依拠した孫サイトが次々にできてきます。そうすると、学生に今のジェンダーのあり方について、何かレポートを書きなさい、と言って彼らが「ジェンダー」で検索すると、その活動サイトが検索上位に出てくる。そうすると、ジェンダーフリーは危険である、とか、男と女は本来ありうる姿があるのだから、とか書くレポートが増えてしまって閉口した時期があったのですが、さすがにこのプロジェクトチームも解散して、安倍さんも女性が輝く社会とか言っているので、今はちょっと鳴りを潜めています。

良質なジェンダーの多様性やジェンダーの歴史、考古学的な情報というのが学生や若い人が簡単にアクセスできるようなあり方を、もうちょっと考えた方がいいかな、とも思っています。